

つまでも苦しみました。

それから数年後、恩給資格者の申請があり、私の兄は該当しました。私の軍歴は、

昭和十九年八月二十二日、マニラ着。

二十五日、マンガレー着、同地駐留。

八月二十二日より十月九日まで、比島全島第三

期肅正討伐に参加、部隊編制、歩兵第十三連

隊第二大隊第六中隊に転隊となり、

十九年十月十一日より第二次揚渡作戦に参加。

十月二十二日 レイテ作戦参加の為マニラ港出

港、

同二十六日 ルソン島南端沖にて遭難し、同日

海防艦にて救助されマニラへ戻る。

十一月 四日 悪状況の為マニラへ逆行す。

〃 十九日 再度、レイテ作戦の為マニラ

発。

〃 二十四日 マスバテ島南端（リンボハ

ン）にて敵機発見、戦闘中輸送船沈没、マス

バ島に避難上陸。比島軍最高司令部の命によ

りマスバテ島の警備。

昭和二十年十月二十四日 武装解除、捕虜収容

所へ入る。

同 二十四日 捕虜収容所発。

同 二十六日 タクロバン収容所着。

同 十二月十八日 タクロバン発。

同 二十七日 横須賀着。

同 二十八日 復員除隊。

同 三十日 実家へ到着。

## 比島戦末期

### 生き残った通信隊員

秋田県 鈴木寅吉

大正七（一九一八）年一月七日生まれですから

昭和十三（一九三八）年徴集となります。現役で

はなく、昭和十九年三月十五日秋田の第十七連隊

の留守隊に召集を受けました。三カ月の教育召集

が終わり、明日、明後日はいよいよ家に帰れると思っていたら、営内で引き続き充員召集を受けましたのでちょっと複雑な気持ちでした。

弘前までは一般の人と一緒に普通列車に乗り、その晩直ちに完全軍装をさせられたのが昭和十九年六月十日頃だったと思います。翌日、十一輛編成の臨時列車に乗せられましたが、防諜上か、窓は開けられない。暑い時でしたが、そのまま広島まで、そこに一週間ぐらい居て、島で上陸演習をやりました。

広島出港は六月二十日頃でしたが、この部隊は独立混成第五十八旅団（盟七二〇三）といい、旅団長は佐藤文造少将で、茨城県出身の方だと聞きました。私は旅団通信隊の有線通信兵となりました。

広島を出帆して、フィリピンのマニラ港へ向かったのですが、十一隻の船団中一隻だけがボカ沈（撃沈）を喰っただけでした。大体船団の半分

着けば良いと予定していたらしいが、十隻着くことができませんでした。何故被害が少なかったかという点、私は通信兵だったが、船の中では通信構成がしてあり、情報が良く判っていました。一般の兵隊は勿論判らないのですが、情報によると、その時は米海軍艦隊がサイパンを総攻撃中で、連合軍も攻撃をマリアナ方面を重点としていて、フィリピン方面は手薄だったわけです。

それでも輸送間は、貨物船に蚕棚を作り、晝一枚に五、六人詰め込まれ寝ることもできない。私には有線通信班なので、二、三人で船の操舵室の後で勤務していたため大分助かりました。マニラへ着くまで空襲が無かったのは、先にも言ったように米軍艦隊がサイパンを攻撃中だったから不幸中の幸いでした。

満州からの比島向けの船団や、マニラ寄港で他へ行く船団があったが、三回ぐらい沈められた船団もあったといえます。そのため、再編成された部隊が多かったのに、我々の盟兵団は無疵だった

から主幹となりました。私たち通信手は司令部と行動を共にしていました。特に有線だから常に司令部とはつながりを持っていなければならないわけです。

マニラへは上陸して一週間ぐらい居ました。高橋和平少尉が長で、秋田市の村井さんなど四、五人だったが、殊に高橋隊長とはよく気が合って、階級抜きで付き合っていましたので、この人とは一緒に帰りたいと思っていました。だが隊長の最後は栄養失調で亡くなりました。

通信隊は設営のため、高橋隊長以下五、六人がトラックで先発、サンフェルナンドを通りウミンガへ設営に参加しました。標高二〇〇〇メートルぐらいの高地バギオへの登り口だったと記憶するが、キャンプワンともいっていました。

そこでしばらく駐留していましたが、もう段々と戦局も皇軍に利なくなつて、九月には、米機動部隊が多数来襲し、日本の空軍も、船舶も大損害を受けていました。十月には米軍がレイテ島に上

陸するし、フィリピン沖海戦で連合艦隊は殆ど全滅、十二月にはレイテ島は完全に占領されてしまったわけです。これなどは戦後日本へ帰つてから知ったことです。

昭和二十年一月七日頃、通信隊の新年宴会の時、私はたまたま勤務中で、有線で緊急電話があり「マニラ沖三〇〇隻ぐらいの大機動部隊来襲あり」というので、その電話の内容を直ぐ司令部へ通信しましたら、どうやら通じました。

司令部から、「翌朝迄に全員配置につけ」という命令が各隊へ伝えられました。その日は一月七日なので、ちょうど私の誕生日だと感じたことを今でも記憶しています。私は若い時から樺太や満州などで働いていましたので、「いよいよ来たか」と度胸を決めました。

通信隊もその命令に従い、完全武装をして戦闘開始を待っていました。敵の空襲は激しくなってきました。リングエン湾には敵の艦船が一〇〇隻

いたということでありました。サンフェルナンドはフィリピンの西海岸、リングエン湾の北にある街で、日本の飛行機が攻撃にいくが、艦砲射撃や対空射撃が激しくて、敵艦の上へ行くまでに射ち落とされてしまう。まったく残念なのですが、特攻機も次から次へと落されてしまったといひます。

リングエン湾には、日本本土を守る要塞砲の三〇センチ砲三、四門が持つてこられましたが一門は輸送中沈没した、その海岸要塞砲は一発で敵の戦車三台ぐらいをフツ飛ばした、という話を聞きました。

我が部隊は昭和十九年八月から二十年三月ぐらゐまでサンフェルナンドのキャンプで守備をしていましたが、一月九日に上陸した米軍は、三月にはマニラを完全占領しましたので、我々は命令により三月中旬頃、バギオに向かって転進、退却しました。

バギオとサンフェルナンドの手前のナギリアン街道の谷間に盟兵団司令部を置いて、しばらくそこにいましたが、三月中旬過ぎからは各隊毎に、生きるための物は何でも取って食べました。これでは日本は戦争を続けることは不可能だと思いううになつたのです。

「腹が減つては戦ができぬ」ということわざの通りです。それまでは「日本は神国で絶対勝てる」と思っていたのですが、大体食べる物が無いのだから駄目だと思いました。

バギオへ行く前でしたが、工兵隊が、敵の戦車が来ると、たこ壺から破甲爆雷を持つて戦車に跳び込んでいました。工兵がやられたら、敵は我々の所へ攻めて来る。私は、やがて我々も工兵隊と同じになる、これが宿命だと覚悟していました。

しかし、通信隊は常に司令部と交信していた。キャンプワンに居た当時、日本軍は退却ばかりしてはならないというので、敵の司令部の電話線を切りに敵陣に潜入することになりました。日

本軍は、昼間は抵抗できないので夜やる。軍命令で行った以上通信線を切らねばならない。その証拠として、切った電線を持ち帰らなければならなかったのです。

私は四回ほど、敵の第一線に侵入して切断に行きましたから一番多くやった方です。或る時、見習士官と五人程で潜入したことがあったのですが、見習士官もやはり命が惜しく、目的地まで行かずに帰ってきました。当時私は二十五、六歳、見習士官は二十二歳ぐらいで、戦闘経験も少ないので無理もなかった、と今にして思います。

その後、キャンプワンから一〇キロぐらいの所、ロザリオ近くの山の谷間にある部隊の連絡所、日本軍の糧秣倉庫、弾薬庫に、米空軍は昼夜の別なく、爆撃をしてみました。そのため、食糧も弾薬も全部焼けて無くなってしまいました。

そこで、バギオから一二キロ北サンフェルナンドに向かってナギリアン街道を転進しました。バギオより八キロぐらいの所にエリサンがあり、更

に四キロぐらいの所に暫く居ました。今はその名前前は忘れて思い出せませんが、バナガンというところであったと思います。

その頃は戦闘より、生きるため、自分が生きるための食料取りでした。バギオはフィリピンの避暑地で、山中や、山の傾斜地に現地人は段々畑を耕していて、芋や豚肉を主食にしていました。その畑を荒らして（現地人は殆ど逃げてしまっていた）芋を取って食い、逃げた豚を捕らえたり、毎日の仕事は生きるための食糧確保でした。

三月から二、三カ月たった頃か、フィリピンは常夏の国で四季の移り変わりが判らないが「司令部に班長集合」があり、私も命令受領のため行きました。その時はもう有線は使えない、というより、もう機器が無かったです。無線はあったのですが、通信隊もただ生きるため、自分たちの食料確保だけ。命令は、戦況が更に悪く転進、退避のことでした。

ナギリアン街道からバギオには入れませんでしたので、エリサンからポンドック街道に向かう近道を越える時、昼夜間断なく、三分、長くても五分毎に砲撃されました。そのために屍が重なっていました。私はその屍を乗り越えていくのですが、死体は暑さのため腐って、死臭というか腐った臭いで大変でした。昼は進めないのです、ポンドック街道はほとんど夜行軍でした。

今も戦友会を毎年やっているが、その話ばかり出ます。「よくも生きて帰れた。我々一人が生きるため七、八人いや十人以上の戦友が死んでいる。だから我々は体を大事にして長生きしなければならぬ。それが戦友への供養だ」。

この生死をかけた苦勞が、戦後ずっと戦友会を開かせているわけだと、つくづく思います。

盟兵団の中でも、通信隊員は比較的生き延びています。亡くなった人は、マラリアや栄養失調が多い。他の兵科のように華々しい戦死は余り多く

はないのですが、食料は自分で取らねば生きていけない。食料取りに出ても、とにかく自分で取った物は、まず自分で先に口に入れ、野鶏でも、羽をむしってまず生のまま食べました。残った物を隊に持って帰る。私は豚の皮や脂肪をとっておいで食べました。健康な者とはかく生き残ったのです。そのため私は生き残れたのだと思っています。

それと同時に、生き抜くという気力、誰にも負けない気力だったと思う。私は家の事情で高等小学校卒業前に、父と一緒に樺太（サハリン）、そして満州へも渡ったのですが、その時も食うのが先だったのです。また何をやっても強かった。テキ屋三人を一人でやつつけたこともあり、若気とはいつても、悪に対しては徹底的にやり、それで私は身を立てました。そんな気性だったから生き延びたのかも知れません。

フィリピンの時、「皆で食べて、たとえ一日でも生き延びて一緒に帰ろう」といって戦友を励ま

していました。だから私は、人を助けたため、その恩恵の報いで、どうやら生きて帰り、今も元気で幸せに生きていると思っています。件せがれにもそう言い聞かせています。

私も戦後、人の世話をしたため苦しんだこともあったのですが、それでも生き抜き、安穏な生活をしています。これは、私の身代わり、犠牲になつて死んだ戦友、面倒を見た人が私や家族を守ってくれているのだと、毎日感謝しています。

## ルソン島戦記

愛媛県 渡部 美喜夫

昭和十六（一九四一）年十二月一日、陸軍兵器学校第三期生電工科入校、生徒隊第三中隊第三区隊（神奈川県相模市）に配属となった。教育期間三カ年であったが、戦況緊迫により二年四カ月に短縮され、昭和十九年三月二十日に卒業、直ちに

広島留守第五師団司令部付を命ぜられ師団通信隊に配属となる。

四月下旬、多摩陸軍技術研究所電波兵器練習部（東京小平）に派遣され、電波警戒機、電波標定機の研究生として六カ月の教育を受けた。

九月三十一日、原隊復帰、十月上旬、南方方面軍司令部付の命令があつた。

出発までに充分日時に余裕があつたので、父との面会の許可を得て故郷の父を呼んだ。広島駅で待ち合わせ、最後となるのではとの思いもあつたが、努めて平常心で一日広島の町を歩いた。父も同じ思いであることは充分察知できた。母は交通事情が混雑しているため同伴できるような体ではなかつた。

夕刻広島駅で切符を買い父に渡した。そして悄然とホームに向かう父の後姿を見送った。父は何回も振り向き手を振っていたが、その手には白いハンカチを握っていた。こうした光景は、当時全国津々浦々の駅頭や、港の棧橋で、毎日のよう